奈良県立奈良図書館報

うんてい

平成8年12月1日

第 67 号

県立図書館整備構想について

館長　橋　戸　敏　弘

今から1,200年前の奈良時代の末期、文人石上宅嗣（やかつぐ）が自宅の一隅に「芸亭（うんてい）」を設けて、一般開放しました。これがわが国最初の公開図書館であり、奈良はその発祥の地でもあります。

奈良の県立図書館は、奈良と橿原の2館でありますが、奈良は、開館87年、橿原は、26年（橿原文庫から56年）を迎えています。現状では、施設の老朽化と狭隘化がめだっており、各種の情報機器の導入もできず、充分な図書館サービスができない状態になってきました。数年後の21世紀には、国際化さらには、激しい社会の変化が予想されています。また、生涯学習意欲の高まりによって、図書館利用者の増大とともに、住民の公共図書館に寄せるニーズは、ますます多様化、専門化の傾向にあります。この高度情報社会のニーズに応えるためには、図書館と情報機関が持つ情報資源をネットワークを通じて共有し、より多くの情報サービスをする必要があります。

現在の状況と将来の展望に向けて、昨年「県立図書館整備基本構想」がまとまりました。この構想では、県内の図書館だけでなく各種の機関とも相互に情報ネットワークを結び、県民の方に多くの資料と情報を提供する県内の中核的公共図書館をめざしています。奈良県の歴史・文化に関する専門図書館として、国内外の資料や歴史的価値ある古文書の収集に努めるとともに、この分野の研究を支援します。そして、これらの専門情報を世界に発信します。さらには市町村図書館への資料の援助、連絡車の運行、レファレンスサービス、職員の研修等の支援を行う計画です。

基本構想をもとに、昨年から5ケ年計画の予定で、バーコード処理、県立奈良・橿原両図書館蔵書のデータベースを構築しています。また、奈良県図書館協会の専門委員会では、本県の地域資料情報に関して、図書館間相互に共通の地域資料データベース構築に向けての取り組みや、公共図書館部会等では相互協力委員会を設けるなど積極的に、ご協力を頂いているところです。

今年は読書週間が始まって50年になります。読書離れが言われて久しいのですが、読書意欲へのかかわりや、人と資料・人と人との触れ合いを大切にした心の安らぎのあるヒューマンライブラリーをめざしていかなければならないと考えているところです。

所蔵資料から

西田　誠三 編『奈良繁昌記（ならはんじょうき）　全』（編者発行）1932年

一般に〈繁昌記物〉は、幕末から明治文明開化期に流行した漢文戯作の一ジャンルであり、都市のもつさまざまな局面を記録・紹介し、批評を加えたもので、『江戸繁昌記』（天保3年）に代表される。のちにこの形式を用いて案内記風な本にも『繁昌記』の名を冠するようになったが、本書もその一つといえよう。

本書は、いわば奈良の商工業に関する本格的な案内書である。「例言」にもあるとおり、従来からこの分野について書かれたものは少なく、管見の限りでは『大和名勝豪商案内記』（明治17年刊）を数えるだけである。

内容は、大きく分けて「商業の案内」「工職業之部」「技芸及雑業之部」の三部構成に加え、著名な弁護士13名、医師15名を紹介し、さらに巻末の「名所の枝折」には奈良の名所113か所の解説・紹介がある。

記事の選択にあたっては、明治29年以降の営業成績をもとに「一職一業に就いて盡く三大家を選出」し、それに評言を加えたといい、「商業の案内」では、布商から菓子商に及ぶ87業種のトップの店3店をとりあげて評言を加え、「工職業之部」では、美術・漆工以下奈良人形師・角細工など36業種の代表的な3店をとりあげている。

いずれにしても、本書刊行の背景には、奈良県の再設置や鉄道の開通など明治20年代以降にみられた奈良の産業界の活況が考えられるとはいえ、従来から奈良には名所案内記の類があっても商工業について書かれたものは少なかっただけに本書の刊行は重要であろう。　（山上　豊）

誌　名　うんていは日本の公共図書館のはじめといえる奈良時代の芸亭院（うんていいん）による。

書誌データベースの構築に向けて
－遡及入力の現状－

図書館が変わりはじめたと言われて久しいが近年、府県立図書館においても新館が次々と建設され、蔵書やサービスの充実とともに大型化、機械化が一層進められています。長い歴史をもつ府県立図書館のリニューアルに際しては大量の蔵書の目録情報をカードあるいは冊子体からいかにしてコンピュータ目録に変換するかが大きな課題となっています。当館でも平成7年3月新県立図書館整備基本構想が策定され、これに基づく事業のひとつとして県立奈良・橿原両館の蔵書の目録情報を遡及変換してデータベース構築を行なうことになりました。

データベース構築にはいくつかの方法がありますが当館では文部省学術情報センターのオンライン共同分担目録システム（ＮＡＣＳＩＳ－ＣＡＴ）を利用しておこなっています。このシステムは参加している図書館が学術情報センターの総合目録データベースを共同で作成、利用するもので、現在全国の大学図書館、研究機関の図書館、公共図書館など468機関が参加しています。構築方法は、オンラインで繋がれたＮＡＣＳＩＳ－ＣＡＴの書誌データファイルに当館の書誌所在データを入力するとともに、蓄積された書誌データから当館のものをまとめてＣＤ－ＲＯＭ、あるいは磁気テープで配布を受け、それをもとに当館所蔵図書のデータベースを構築するというものです。

ＮＡＣＳＩＳ－ＣＡＴ には参加館の書誌データが図書367万件、雑誌21万7千件が収録されているほか、国立国会図書館（JAPAN-MARC)、大手取次店（TRC-MARC)、米国議会図書館（LC-MARC）などの書誌データも参照することができ、豊富な書誌情報が得られると同時に、参加館の資料の相互利用の貸借システム（NACSIS-ILL）や情報検索サービス（NACSIS-IR）等他のシステムも合わせて活用することができます。

当館の印刷室を作業室としてデータ入力用オンライン端末6台、ワークステーションなどを設置し館内ＬＡＮを敷設。平成7年8月に通信回線を通して学術情報センターに接続し、9月から職員6名アルバイト6名で遡及入力を開始しました。

遡及入力の対象となる資料は奈良図書館の図書約20万冊と永年保存雑誌約10万点、橿原図書館の蔵書のうち奈良図書館と重複するものを除いた図書約4万冊、永年保存雑誌約1万点、合わせて図書約24万冊、雑誌約11万冊です。当館の所蔵資料は明治期の開館以来のもので古い資料が多く、内容も官公庁刊行物、和本、各種報告書類、洋書、私家版など多岐にわたっており目録カードが整備されていないものもあります。入力作業にあたっては前処理としてこれらを整理、グルーピングして入力用カードを作成しておき、ＮＡＣＳＩＳ－ＣＡＴの書誌データヒット率が比較的高い資料から順次入力を行なうことになります。

こうした入力対象図書の選択、入力順位の決定、未整備の目録の再編成やまたＮＡＣＳＩＳ－ＣＡＴへの習熟、類似の書誌データの同定など、入力作業にはさまざまな局面があり、これらの細部について担当者が打ち合せを重ねながら遡及入力全体の流れを調整していくというかたちで作業をすすめています。

一つの書誌レコードを参加館が共有するこの目録方式ではＮＡＣＳＩＳ－ＣＡＴに書誌データがあれば、所蔵を登録するだけで瞬時に目録を作成することができ、当館の従来の目録業務の負担が軽減されることになります。一方、書誌データのないものについては当館で新たに作成する必要がありますが、参加館が共有する目録として学術情報センターの「目録情報の基準」にそって標準化された、精度の高い書誌データを作成することが作成館に求められることになります。

遡及入力を開始して1年3ヵ月が経過しましたが、ＮＡＣＳＩＳ－ＣＡＴのヒット率が比較的高いこともあって、11月末現在の入力冊数が132,464冊と順調に作業をすすめることができました。今後の入力作業はＮＡＣＳＩＳ－ＣＡＴに書誌データがないものについてオリジナルデータの作成入力、とくに標準化が難しい郷土資料のデータ作成など遡及入力のなかでも最も困難な作業と取り組むことになります。また橿原図書館所蔵資料、逐次刊行物なども遡及入力作業全体を見通しながら調整をすすめていく必要があるでしょう。

（館内奉仕第1係　井上はるみ）

シリーズ近代文学と奈良 4

人と自然と －川村たかしと『新十津川物語』－

明治22年8月、折から降り続いていた雨はやがて豪雨となり、十津川流域を大洪水で洗い流した。また風化し易い岩層の上に乗っていた軟弱な土壌は各地で山崩れを引き起こし、未曾有の大災害と言われる被害を吉野郡一帯に及ぼした。流失家屋267戸、全壊家屋159戸、半壊家屋184戸、死者168人、負傷者20人。流亡した田畑はそれぞれ50%及び20%。1,800ケ所で山が崩れ落ち、そのために新湖が37ケ所に出現し、その新湖の崩壊が更なる被害を与えたという。世に言う「十津川の大水災」である。この惨状がどれ程のものであったかは、当時の新聞が〈十津川地方の変災は世人の最も驚愕したる所にして…〉と伝えているところからも計り知ることができる。

災害の報道が全国に伝わるにつれ各地から義援金品が届けられ、官民一体となっての災害救助対策により何かと急場はしのいだものの、田畑を流され、住む家を失くした三千人もの人々の今後をどうするかが、関係者の議論を呼んだ。折しも当時の国内には海外移民の気運が高まり、罹災者を海外へ移住させ新日本をつくるべしなどの意見もあったと言うが、罹災者に大いなる同情を示した当時の北海道庁長官永山武四郎の書簡が発端となり、罹災者の北海道移住計画が俄かに具体性を帯びてくる。在京郷人の手により「北海道移住新十津川創立勧告書」が作成され、郷内にあっては文武館（1864年孝明天皇の内勅により十津川郷の郷学として開設される。現十津川高等学校）館長橋本好蔵・東武・西村直一・藤井正太郎らが、北海道移住を村民に説いて歩いた。その結果600戸、2,691人が移住を決意し、災害から僅か3ケ月後には600戸、2,489人が郷里を後にしている。二度と帰ることはないであろうふる里と別れ、彼らは未知なる地へと渡って行った。現在の北海道新十津川町を拓いた人達である。

この大水災を題材に、当時九才の架空の少女「フキ」を主人公に据え、全十巻に及ぶ大河物語を児童文学の形で書き続けた作家がいる。郷土の作家川村たかしである。

川村は1931（昭和6）年、奈良県五條市に生まれた。物語の最初の舞台となった十津川郷から北へ約78キロ、バスでおよそ3時間の所である。高校卒業後1年間は父を助けて農業に携わるが、その後大学に進学。大学卒業後は地元の小・中・高等学校で教鞭を執っている。

大学時代より創作を始めていた川村は〈いつしか十津川の大水災を背景に長編を書きたい〉と考えだしていた。しかし実際に彼がその作業に執りかかるのには処女作『川に立つ城』を書いてからおよそ十年の歳月を必要としている。勿論この間、川村が何もしていなかった訳ではない。彼は調べていたのだ。調べながら他の作品を書いていたのだ。川村の取材の量には〈いくつかの伝説が生まれている〉という。初秋の十津川村の役場で、北海道の古本屋街で、新十津川町で、『新十津川物語』を書くために川村が費やした時間について人々が色々と語っているらしい。川村自身は入念な取材についてこう語っている。

> 蔵の中でローソクの光をたよりに空想をたくましくしたり、幼い頃の思い出を書くだけでは、スケールの大きな新しい児童文学作品は生まれようがない。子どもが読者だからこそ、いいかげんな手ぬきはおとなとして恥ずかしい、という考えではなくて、手ぬきすればこちらが不快だったからにすぎない。児童文学作品は文学として二流品視されている風潮をどこかで感じていた。結果が失敗であるのと始めから手ぬきしたり、迎合したりするのとはワケがちがう。調べることは唯一の投資なのである①。

その結果、川村はみごとなまでに生き生きとした主人公「フキ」を生み出し、そのフキの人生を厳しい自然と対比させることにより十巻を完結させた。そこには確かな“人”が描かれ、人を育んだ“自然”が書き込まれている。

津田フキは、十津川の大水災で両親を亡くし、兄の照吉、父の親友であった菊次一家らと共に北海道へ移住することとなる。頼りにしたい姉のたつのはたった十五歳で嫁に行くという形で一人十津川に残ることになる。心を決めて渡ってみたものの初冬の北海道でさえ温暖な風土に慣れた

屯田兵村での様子

十津川人たちにとっては聞きしに勝る酷寒の地だった。

「えらいところへきたやないけ。」

照吉がだれにともなくいった。

「おれはどうもだまされた気がしてならん。」

「もってゆくところがのうて、北海道へすてられたか。」

野崎正道があいずちをうった。

「そうや、すてられたんや。」[2]（第1巻）

最初に聞いた話と現実とのあまりの相違に次々と落後者が出、兄の照吉もフキを残して逃亡してしまう。一人ぼっちで取り残されたフキは菊次一家に引き取られ、いよいよ原野の開拓が始まるが、失火による火事により菊次一家もまた窮地に立たされる。仕方なくフキは同じ十津川出身の母方の伯父の元へ女中奉公のような形で身を寄せる。伯父の家族のフキへの仕打ちにも彼女は決して屈しない。やがて伯父の家を追い出されるように出たフキは、吹雪の日に助けてくれた杉村少尉の求婚を断り、幼なじみであった菊次の長男、豊太郎と結婚する。土と生き続ける彼女を次々と困難が見舞うが、彼女は決して負けない。

フキの結婚式の朝

「この土の上で生きていくしかしゃないもんな。うらぎられてもうらぎられても、土を信じるしかないやんか。にげていくところみたいな、ないやんか。」[2]（第2巻）

その後も彼女は招集後生きて帰ってきたものの、体をこわし別人のように気力をなくしてしまった夫に対しても文句一つ言わず、ひたすら土と向き合って生きていく。やがて子の代になり孫の代になってもフキの生き方は変わらない。孫の二人を戦争で亡くし、赤ん坊の時に拾って我が子同様に育てた息子豊彦が、労働運動に関わっていたために警察に惨殺されたらしいと知らされても、若い命を奪った相手に対して「決して許さない」と怒りはしても、打ちひしがれることはない。

新村開基七十周年を祝う祝典で、フキは開拓功労者として表彰されることになる。しかし彼女はこの日のために孫たちが贈ってくれた絹の着物は着ずに「農民の晴着」モンペで出席する。七十年で村は随分変わった。百年たてばもっと変わるだろうと思いを馳せる彼女の前に、自然は尚もその厳しさを見せている。

フキは強い。この強さは並みのものではない。またフキは耐える。それも下を向いて重い荷物をじっと背負う耐え方ではなく、しっかりと前を見て運命を享受する耐え方である。またフキは浄らかである。そして潔い。まるで人間の良い部分をすべて体現したような人物である。そしてこの人物はしっかりと自然の中にあって光を放っている。〈人間とは何かという大きな命題から目をそむけずにいこう。さまざまな形で探っていこう〉と、人間を描くことにこだわった川村たかしは、児童文学という形でそれを表そうとした。

成人向けの小説と比べてどこが違うのかと問われれば、児童文学では人間の理想を描くことができると、今でもぼくはそう思っている。今でもというのは、現代が理想などという大時代風のものを喪失したという反論が聞こえてくるからだ。（略）生命のほめ歌としての文学、人間賛歌が、明日を生きる読者にふさわしいのは言うまでもない。しかもここにはファンタジーという格好の様式さえ備わっている[1]。

川村の児童文学という形で人を描くというこの試みは、十数年に渡る『新十津川物語』の執筆を通し、ほぼ成功したと思われる。そしてもう一つ、フキという理想の人物に命を与えたものが我々の身近に存在している。

フキのふる里十津川村は、大水災の後もそこに残った人の手で土が耕かされ、山が守られ、静かに生き続けている。十津川の山を前にして立つと、都会では絶対感じることのできない不思議な空気の在り様を肌が感じる。人格を形成する要素は決して人為的なものだけではない。その土地、その場所、そこに在る自然の“気”がその人を創り出す大きな要素となる。フキという理想の人間を育てあげた素は、この十津川の山々にもあるのだ。

《参考・引用文献》

① 川村たかし著「新十津川村物語を書きながら」（『日本児童文学』'87年11月号）

② 『新十津川物語』（全10巻　偕成社）

- 新十津川町『新十津川百年史』（1991年）
- 十津川村役場『十津川』（1961年）
- 『大阪朝日新聞』（1889年9月4日付）
- 加藤多一著「未知の人・川村たかし」（『日本児童文学』'81年4月号）
- 松田司郎著「もう一人の川村たかし」（『児童文学1981』）
- 川村たかし著「牛型の弁」（『飛ぶ教室』20号 1986年）
- 篠遠喜健著「川村たかし－作家カタログ－」（『飛ぶ教室』26号　1988年）

（児童室　小西　雅子）

レファレンス・あれこれ (11)

閲覧室

Q ① パール・バック著「愛國者」の原題が知りたい。
② Thich Nhat Hanh の著書で 1967 年に邦訳された本のタイトルと所蔵の有無が知りたい。

A 図書館にしばしば寄せられる質問のひとつに、翻訳書の原題や邦題に関する調査があります。

英文で書かれた文学作品の邦訳の有無、原書名を調べる参考図書としてよく使われるものに『明治・大正・昭和翻訳文学目録』(国立国会図書館編 風間書房 1984) があります。明治初年から 1955 年までに邦訳された欧米の文学作品を中心に収録しており、この時代の翻訳書が最もよくカバーされています。質問の「愛國者」は著者 "バック Back, Pearl" の項を見ると 86 点の邦訳書が掲載されており、「愛國者」の原書名は「The Patoriot」。1939 年、山内敏の訳で改造社から出版されていることが確認できます。

ちなみに「愛國者」はパール・バックが 47 歳の時に出版されており、当時注目されてた日中戦争を背景に描かれていること、ノーベル賞受賞後初の作品であったことからベストセラーとなったということです。パール・バックが日本を題材として書いた小説でもあります。

こうした英米文学の代表的な作家であれば、『年表英米文学史－翻訳書併記』(荒竹出版 1975)、『英米文学翻訳書目』(沖積舎 1990) 等でも簡単に見いだせます。

より新しい翻訳書については『翻訳小説全情報 45/92』(日外アソシエーツ 1994) が 1945 年から 1992 年の間に出版された翻訳小説・戯曲を収録しています。また、全集・選集に収載されている翻訳文学作品を収録したものに、『東京都立中央図書館蔵合集収載翻訳文学索引』(東京都立中央図書館 1977) があり、単行書では探せない個別の作品 2,400 点について検索することができます。

②は質問者によればベトナム戦争の記録であるということです。文学作品以外の翻訳書の検索には『翻訳図書目録 45/76』(日外アソシエーツ 1991) がⅠ総記・人文・社会、Ⅱ科学・技術・産業、Ⅲ芸術・言語・文学、の各分野別にまとめられており容易に検索できます。質問の図書は人文・社会の分野を著者名で検索、Nhat Hanh, Thich の項をみると、『火の海の中の蓮華 ベトナムは告発する』ニヤット・ハン著 日野啓三訳 読売新聞社 1968 年、とあります。著者は南ベトナムの僧侶で、平和運動家。ベトナム戦争当時、おもに欧米諸国の読者に対して仏教徒の立場からベトナムの平和についての考え方を表明したものです。原題は「VIETNAM－Lotus in a sea of fire」。

著者名は日本語表記ではあいまいなものが多く原綴りでの検索が早道でしょう。翻訳書の調査では発行年も大きな手がかりです。

質問の 2 冊はいずれも当館で所蔵しています。

(井上はるみ)

郷土資料室

Q 奈良県での柿渋の利用について、歴史的なこともふくめて知りたい。

A 柿は大和の風土にあった果樹の一つであるが県内の柿渋の利用などが書かれたものはほとんど無く『柿の民俗誌』が唯一の文献と言えよう。

この本は、近世の辞書・農書の諸文献から柿渋を引用されていて、例えば、当時の百科事典『和漢三才図会』の「椑柿(しぶがき)」には、柿渋(しぶ)の造り方と共に「紙を染め衣と為し、行李裏と為す。布を染めて酒搾袋(さかぶくろ)と為す。或は墨を和(ま)ぜて筧(かけひ)を塗る。皆水の為に朽ち易からず。或は漆塗の下に先づ柿渋を用う。」と紹介し、解説も加えられ、江戸時代は一般的に防腐剤・防水剤として柿渋の利用が盛んであったことがわかる。

奈良ではどうであったのか。『奈良市史』には渋団扇(しぶうちわ)がでてくるが、高畠(畑)で三十五万余とあるだけで詳細はわからない。さきの『柿の民俗誌』には「奈良の町を柿渋の入った樽を積んだ馬車が往きかった」と書かれていて、柿渋屋というのは無く、売りに来ていたと著者は推測している。

また引用の農書『広益国産考』には「畿内ニテハ大和吉野郡(やまとよしのごおり)、宇多郡(うたごおり)より多く出(いだ)し」と大和が渋柿の産地と記されているが、その利用は串柿が主で、柿渋は特産ではなかったようだ。

吉野などの山間部では竹籠に和紙を貼って柿渋を塗り、消火バケツなどとして利用されていることにもふれているし、吉野山は修験道の本場で、山伏が身に付けた「柿衣」「柿帷子」が渋染の始めではなかったかとされ、柿渋色の衣を、山伏などが着用した事から、アウトローの人々を示す色として、非人などの身分を表していたという推測もされているほか、柿渋を搾る柿樹が、人里離れた山間や荒地に植えられたのは、畑年貢の対象から逃れるための知恵であり、浄瑠璃寺や岩船寺周辺の山城地域では、柿木役のため樹を伐り、渋柿が急減することにもなったという事例も紹介されている。

いずれにしても、渋団扇という例はあるものの奈良県では渋紙や漆器などの産業としての利用よりも人々の暮らしの中で生かされたようである。

《参照資料》

・今井啓潤著『柿の民俗誌 柿と柿渋』(『近畿民俗叢書 8』現代創造社 1990 年)
・寺島良安編『和漢三才図会 巻八十七 山果類』(『日本庶民生活資料集成 第 29 巻』)
・大蔵永常著『広益国産考 四之巻』1859 年(『日本農業全集 第 14 巻』)
・奈良市史編集審議会編『奈良市史 通史三』(奈良市 1988 年)
・今井啓潤著「柿渋の利用の歴史 1」「木器と柿渋」(『近畿民俗 '93, 131・132 合併号』)

(菊井 直子)

郷土資料室受入県内発行資料目録　— 抜 粋 —

（1996.1～96.7）

主題	資料名	著（編）者	発行者	発行年月
総記	図書目録　平成7年4月現在	奈良県議会事務局	奈良県議会事務局	――
	正倉院年報　第18号	宮内庁正倉院事務所	宮内庁正倉院事務所	1996. 3
宗教	吉水全集	中沢栄太郎	吉野朝皇居吉水神社社務所	1929. 4
	春日の神々への祈りの歴史	大東延和	〔大東延和〕	1995. 11
	法隆寺要集	法隆寺学研究所	法隆寺	1996. 5
	南都大安寺論叢	南都国際仏教文化研究所	大安寺	1995. 11
歴史	古代の寺を考える　年代・氏族・交流	帝塚山大学考古学研究所	帝塚山大学考古学研究所	1991. 9
	平成4年度 唐古・鍵遺跡第52次発掘調査概報（田原本町埋蔵文化財調査概要13）	田原本町教育委員会	田原本町教育委員会	1993. 3
	平城京木簡1（奈良国立文化財研究所史料 第41冊別冊）	奈良国立文化財研究所	奈良国立文化財研究所	1995. 2
	柳沢家譜集	柳沢文庫保存会	柳沢文庫保存会	1995. 11
	奈良のあゆみ（改訂新修版）	木村博一	奈良市	1996. 3
	奈良阪町史　平城山の一隅を観る	村田昌三	〔村田昌三〕	1996. 4
地理	竜王山古墳群（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第68冊）	奈良県立橿原考古学研究所	奈良県教育委員会	1993. 3
	奈良　Nara special photo guide	奈良市	奈良市	――
	鳥見霊畤新考	森口奈良吉	〔森口奈良吉〕	1939. 8
	初瀬名所古蹟案内	中島寛二	中島書店	1910. 4
社会	部落問題学習の充実をめざして「部落史の見直し」と教育内容の創造	奈良県教育委員会	奈良県教育委員会	1995. 3
	奈良県勢要覧1996	奈良県総務部知事公室統計課	奈良県総務部知事公室統計課	1996. 3
	奈良県新総合計画 前期実施計画 平成8年度－平成12年度 世界に光る奈良県づくり	奈良県	奈良県	1996. 3
	統計なら 平成7年版（1995年版）第27回	奈良市総務部文書課	奈良市役所	1996. 3
	研究紀要 創刊号～第2号 平成5～6年度	奈良県立教育研究所	奈良県立教育研究所	'94.3～'95.3
	奈良県音楽近代史　音楽教育を中心に	平井　啓	〔平井　啓〕	1995. 12
	奈良県立医科大学五十年史	奈良県立医科大学50周年記念準備委員会	奈良県立医科大学	1995. 9
	奈良県の公民館	奈良県公民館連絡協議会	奈良県公民館連絡協議会	1996. 3
	大和がすり　郷土に育まれた染織	奈良県立民俗博物館	奈良県立民俗博物館	1995. 9
自然	奈良県の台風40年	奈良地方気象台	奈良地方気象台	1994. 6
	「Deer my friends」報告集 95秋の通信	Deer my friends	ゆるき	1996. 4
	奈良公園のシカ市民調査・結果報告			
工学	奈良県の工業（工業統計調査結果報告書 平成6年）	奈良県総務部知事公室統計課	奈良県総務部知事公室統計課	1996. 1
産業	農作物病害虫および雑草防除指導指針 平成8年度	奈良県農林部	奈良県農林部	1996. 3
芸術	特別展日本仏教美術名宝展 奈良国立博物館開館百年記念	奈良国立博物館	奈良国立博物館	1995. 4
	平山郁夫展　シルクロード・仏教・大和路	平山郁夫	奈良県立美術館	1995. 4
	月山貞一回顧展　その技と伝統	奈良県立美術館	奈良県立美術館	1996.
語学	大和高田界隈方言集－大和高田市老人クラブ結成三十五周年記念－	大和高田市老人クラブ連合会	大和高田市老人クラブ連合会	1996. 4
文学	真土山（〔大和歌人協会〕年刊歌集 第24集 平成6年度）	大和歌人協会年刊歌集部	大和歌人協会	1995. 3

利用案内

開館時間　閲覧室、読書室、学生室　9：00～20：00
郷土・行政・文化財資料室、児童室　9：00～17：00

休館日　月曜日・祝日・月末・年末年始・ばく書期（春季約2週間）

奈良県立奈良図書館報　うんてい　№67　平成8年12月1日発行
〈発行人〉橋戸　敏弘　〈発行所〉奈良県立奈良図書館　〒630 奈良市登大路町　☎0742（27）0801